

へ論 文（民俗学）へ

日本磯漁伝統の研究 [XI]

——磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究——

田 邊 悟

要 旨

海村研究の課題の中には、海人の移動・漂泊の問題、海人と商^{あきな}いとの関係などもある。

その研究目的の一つは、特に磯漁（磯漁民）のような始原的な漁撈活動や生活実態を調査することで、その中に古い時代の海人の伝統生活をみいだそうとすることにある。

それはまた、四囲環海のわが国民の基層文化を明らかにする文化要素を抽出するための基礎調査であり研究であるともいえる。

本稿では海人の移動・漂泊の問題のうちの、「家船^{えぶね}」が移動・漂泊をやめ、岡（陸）に定住することによる漁撈伝承・漁法等の内容をみていく。その一事例として、大分県臼杵市大字大浜（旧北海部郡海邊町津留^{つる}）についてみることにした。

キーワード

磯漁 見突き漁 イソツキ アワビ 家船 海村文化 漁撈文化 漁撈伝承 漂泊

目 次

(2) (1) 研究目的（承前）

磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[I] 大分県臼杵市（旧北海部郡海邊町）大字大浜（津留）の「イソツキ」

（一）はじめに

（二）地域の史的背景など

（三）漁業生産暦と漁法

（四）農業生産暦と農業

（五）イソツキ（漁法）と漁具

（六）漁船・その他の聞取り

（七）まとめ

(1) 研究目的（承前）

本稿でいう「磯漁」とは、ムラ的地先における磯浜海岸や砂浜海岸での漁場において、魚貝藻（魚介）類の捕採にあたる男女の漁撈民・漁業者一般をさす。しかし、裸潜水漁によつて魚貝藻類の捕採にあたる、所謂蟹人（海人・海士・海女）は含まれていない。その理由は、裸潜水漁撈者である蟹人については別稿であつたためである。したがつて蟹人に関しては拙著『日本蟹人伝統の研究』（法政大学出版局）を参照されたい。また、「徒（歩）磯漁」とよばれる小型漁船を使用しない「徒」による磯漁も含まれていない。

磯漁伝統の研究目的のひとつは、四囲が海のが国にあつて、海とかかわりをもちつつ暮らしをたててきた人々の始原的で素朴にして基層的な生活伝統が伺えるため、この方面の研究をおこなうことで海浜生活の基層文化の要素を抽出しようとするところにある。

(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[I] 大分県臼杵市（旧北海部郡海邊町）大字大浜（津留）の「イソツキ」

（一）はじめに



大分県臼杵市臼杵
国土地理院発行 1:25,000

大分県臼杵市の臼杵湾にそって、諏訪・大浜・中津浦とよばれる「大字」がつづくが、その「大字諏訪」の中の「小字」に「津留」という地域がある。津留は、臼杵湾において、瀬戸内海の能地から家船がやってきて船住いはじめたところといわれ、口碑によれば、慶長十年（一六〇五）に、五艘の家船の移住者から、しだいにムラが形成されるまでにおよんだと伝えられる。

その五艘の家船は、「矢田想兵衛・金剛与十郎・樋口太郎・大原源兵衛・竹永六良という」姓をもつ五家族だ」といわれる。^{注(1)}

また、津留では家船のことを「船屋」とよんできたというが、庵寺の墓地に先祖の墓とよばれる墓碑もある。^{注(2)}

この地の移住者については、さきに羽原又吉が『漂海民』の中で吉田敬市の調査を引用しており、拙著『日本蟹人伝統の研究』中においても調査結果を示してきた。^{注(3)}^{注(4)}

すなわち、「漁民の移動」・「漂泊」が漁民の民俗研究の課題あるいは問題の所在としてあつかわれてきた結果であつたためである。

しかし本稿においては、このような課題とは別に、家船の人々が定住するようになって土地所有には限界があるだろうし、漁業専業といっても、生産手段にはかなり制約があるように思われる。

それ故、「船屋」の人々の先祖が定住するようになり、ムラをつくるに至ったといわれる地域の漁業者の漁業にかかわる内容を明確にするとともに、本稿の課題でもある、この地域の磯漁伝統（イソツキ）の実態を実証的に明らかにすること、それが本稿の目的である。

(二) 地域の史的背景など

臼杵市は北東を北海道郡佐賀関町に、東を津久見市に接し、臼杵湾をかかえるような位置にある。

『豊後国風土記』^{注(5)}に散見される「海部の郡」^{あまこほり}は、現在の臼杵市という行政区画になる以前、この地は大分県北海部郡海邊村とよばれていたことにあわせてみれば、その土地柄が伺えよう。すなわち、前掲書中に、「此の郡の百姓は、竝^{みな}、海邊^{うみべた}の白水郎^{あま}なり。因て海部^{あまこほり}の郡^{こほり}という」とみえる。

広島県の家船の人々のうち、吉和^{よしわ}の家船の人々は伝統的に一本釣をおこない、二窓^{ふたまど}の人々は延縄漁^{はえなかり}を、能地^{のうじ}の人々はテグリ網漁の伝統漁法をそれぞれ守ってきたとされる。

しかし、後述するように、津留^(大浜)へ進出し、定住した能地の家船の人々が、この地では網漁^(テグリ漁)だけでなく、網漁にあわせて、それまではおこなわなかった「視突き漁」^(大浜ではイソツキという)を組み合わせて捕採をおこなっているのは、瀬戸内の海とはちがった捕採対象物^(漁獲物)が新しく移り住んだ地にはあったため、この地にきてから新しい漁法を組み合わせて漁業生産をおこなうようになった結果とみてよい。

ちなみに「イソツキ」による捕採物の主なものはアワビ・サザエ・ナマコ・アイナメ・ホゴその他の磯魚・テングサなどの海藻である。

上述したように、津留は五艘の家船の人々によってムラが開かれたという口碑があるほかに、「庵寺^{あんでう}」とよばれ

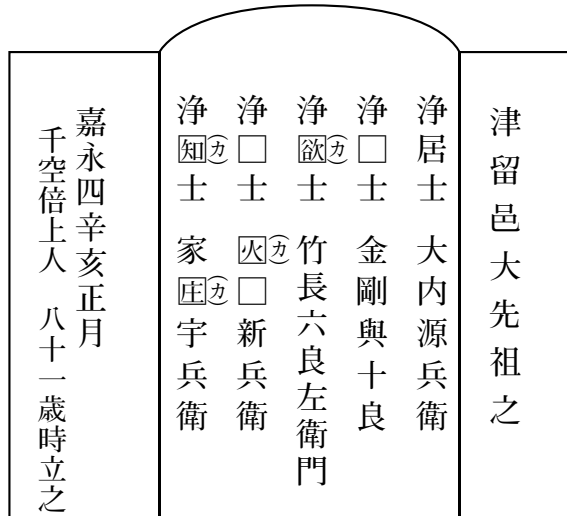
る庵の墓地に「嘉永四年（一八五二）」に「千空倍上人」が八十一歳の時に建立した「津留^ど邑大先祖之」（なり）という墓碑がある。

この墓碑を調査してみると、さきに掲げた口碑による五艘の家船の人々とかなり近い姓名であることがわかる。

すなわち、大原源兵衛は大内源兵衛にあてられるし、金剛与十郎は金剛與十良で同じ、竹永六良は竹長六良左衛門、樋口太郎は^力口新兵衛にあてられるが火（^力樋）の文字は墓碑では判読できない。風化してしまっているためである。そして、矢田想兵衛にあてられる人は家^力宇兵衛のように読めるが前掲書の『漂海民』では家庭兵衛としている。

いずれにしても慶長十年（一六〇五）から二百五十年も過ぎた嘉永四年（一八五二）に建立した墓碑であることを思えば、不明確ではあるが、他に史（資）料とすべきものがないので参考にせざるをえない。

しかし、重要なことは、次に掲げる資料（文書）に能地の人々が伝統的におこなってきたとされる「テグリ網」



（昭和52年 8 月 1 日調査）

（手繰網）の関係資料がある事実である。

このことは、瀬戸内の能地からこの地に移り住んだ家船の人々が、定住してから今日に至るまで四百年近くものあいだ同じ漁業の伝統を守り続けてきたことを意味することで重要な点であり、注目したい。

まず、大浜漁業協同組合（旧海邊村漁業組合）

が明治四十一年七月三日に農商務大臣に提出するために作成した「専用漁業免許状」（写）にかかわる資（史）料によれば、漁業の種類・漁獲物の種類・漁業の時期などは次に掲げる表の通りである。

この資（史）料中、網漁業についてみると、鰺船曳網と練網の二種類しかみえないが、次に掲げる昭和二年六月二十九日の資（史）料中に、「海鼠漁業」は「手繰網」によるものであると記載されているので網漁業は三種類となる。

現在、大浜にある漁業協同組合に保管されている旧大分県北海部郡海邊村の海邊村漁業組合の「漁業組合の概況」を示す資料（文書）を見ると、

漁業の種類・漁獲物・時期（第一表）

漁業の種類及び名称		漁獲の種類	漁業の時期
鰺船曳網漁業	あじ ねり あみ	あじ さば かます 鰯	自五月一日 至十月三十一日
練網漁業	ねり あみ	めばる やはげ やばんど	自十一月一日 至十二月三十一日
鮑漁業	あわび	あわび	自十一月一日 至十二月三十一日
蝶漁業	さざえ	さざえ	自十一月一日 至十二月三十一日
海鼠漁業	なまこ	なまこ	自十一月一日 至十二月三十一日
蛸漁業	じがい	蛸（いしかい）	自十一月一日 至十二月三十一日
沖蛸漁業	こまのつめ	沖蛸（方言こまのつめ）	自十一月一日 至十二月三十一日
海羅漁業	ふのり	海羅（羅） ふのり	自十一月一日 至六月三十日
鹿尾菜漁業	ひじき	鹿尾菜	自十一月一日 至翌年五月三十一日

（明治四十一年七月三日）

昭和二年六月二十九日に作成したものであるとして、

一、組合員数 副業者数 合計

二一二人 十三 二二二人

二、最近三カ年間の経費決算高

大正十五年 大正十四年 大正十三年

四三一円 三九三円 七九二円

三、最近五カ年間の総漁獲高

大正十五年度 大正十四年度

一二〇、〇〇〇円 一〇八、〇〇〇円

大正十三年度 大正十二年度

八六、〇〇〇円 九〇、〇〇〇円

大正十一年度

一〇〇、〇〇〇円

四、専用漁業権利用の状況を知るべき書類として、漁業名称毎の漁具類又は漁船数、従業者数として、次の表を掲げている。(第二表)

なお、筆者が錦地の最初の調査をおこなった昭和五十二年（一九七七）八月一日の聞き取り調査によれば、臼杵市

漁業協同組合の海部支所あまべにおける大浜の漁業協同組合員は五十八名、中津浦は三十八名、津留は家数百二十戸中の十二名が組合員で、当時でも打瀬網漁が主であるということであり、この打瀬網漁は慶長年間の頃からの伝統があると伺った。

また、当時、臼杵市大浜五組在住の平川光義氏はタイの延縄漁をおこなっており、ユリバチとよばれるハチの中にシュロ製の幹縄（ヤマと呼ぶ）に、枝縄のテグスを付けてタイを釣るほか、ヘイジ・メプトなども釣ったと聞いた。さらに一月から三月にかけては出稼ぎ漁にも出かけ、土佐沖まで出てカツオ一本釣をおこなったこともあるという。

こうした聞き取り調査を裏付けるように、昭和五年十月の専用漁業変更願の中の漁業権増加の種類の

漁業の種類・漁具・漁船及び従業者数など（第二表）

漁業名称	漁具の名称	漁具の数	漁船数	従業者数
鱈船曳網漁業 <small>あじ</small>	鱈船曳網	二	二	六〇
練網漁業 <small>ねりあみ</small>	練網 <small>めばるやけやはんど</small>	二	二	六〇
鮑漁業 <small>あわび</small>	竿突	四〇	二〇	四〇
蝶漁業 <small>さざえ</small>	竿突	四〇	二〇	四〇
海鼠漁業 <small>なまこ</small>	手繰網	四〇	四〇	八〇
蛸漁業 <small>いしかい</small>	手採・クワ	二〇〇	—	二〇〇
沖蛸漁業 <small>こまつめ</small>	クワ	二〇〇	—	二〇〇
海羅漁業 <small>ふりの</small>	手採	—	—	二〇〇
鹿尾菜漁業 <small>ひじき</small>	手採	—	—	二〇〇

（昭和二年六月二十九日）

変更の中に、「一、鯛延縄漁業・鯛・漁業時期自一月一日至十二月三十一日」とみえる。鯛延縄漁業などについては後述する。

(三) 漁業生産暦と漁法

調査地の大浜では磯漁（見突き漁）のことを「イソツキ」と呼んでいる。組合資料（前掲）には「竿突」とみえるが、これは「漁具の名称」をいうにすぎない。

臼杵市大字大浜における漁業の生産構造は二層（二重構造）になっているとみてよい。

一つは、もとよりこの地で伝統的な漁業生産活動を営んできた漁業者層で、それらの漁民による漁業生産構造は、組合資（史）料（前掲）に見られるように、内容がやや豊富であるのに対して、他の層は、もとは家船（船屋）で移動生活をつづけながら漁業生産を継続してきた「イソツキ」で暮らす人々である。家船の人々は、のちに定住するようになってからこの沿岸で「イソツキ」をおこなってきたとみられ、それらの人々の漁業生産構造は単純である点が注目される。このことは、漁業にかかわる生産手段に資本を繰り入れることなく、生産規模の拡大がおこなわれないまま今日まで伝統生活が継続されてきた層とみてよい。すなわち、「イソツキ」で暮らす人々は、資本の蓄積がなくても、網漁具等以外、生産手段にかかわる投資が少なくても生業が可能であることがその背景にある。土地所有が少ないことも共通しているとみられる。

話者の平川一男氏（明治四十一年十二月十五日生）は、年間を通して「イソツキ」を専門におこなってきた一人である。

「イソツキ」の主な捕採対象物は、アワビ・サザエ・ナマコであるが、その他イソザカナ（磯魚）のアイナメ・ホゴなどを突いた。また、テングサなどの海藻採取もおこなってきた。

「イソツキ」の漁期は、アワビ・サザエ採取等が十一月いっぱいまで禁漁になっているため、十二月初旬から翌年の三月または四月にかけておこなわれた。桜の花見頃になると雨の降る日が多くなり、海水が濁りはじめてイソツキはできなくなってしまう。

アジは一本釣で漁獲された。漁期は四月初旬にはじまり、七月から八月いっぱいまで。毎年イソツキの漁期が終わるとアジ一本釣をおこなってきた。

スルメイカも一本釣によって漁獲してきた。スルメイカの漁期は八月初旬頃からはじまり、十月いっぱい頃までだが、漁があれば、その後の十一月にはいつでもおこなわれることがあった。

このようにイソツキと一本釣という、漁船以外には生産手段に資本のかからない漁業生産がおこなわれてきた点は、わが国の漁業の中に位置づけられる磯漁伝統の経済

大分県臼杵市大字大浜（津留）の漁業生産暦（新暦） 平川 一男氏聞書
（明治41年12月15日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
イソツキ				-----									アワビ・サザエ ナマコ・テングサ アイナメ・ホゴ
アジ一本釣				-----									
スルメイカー一本釣								-----			-----		

（昭和62年1月22日調査）

的、社会的な背景を見定める存在理由がそこにある。

(四) 農業生産暦と農業

この地は、もとより耕地に恵まれた土地柄でないため、漁業にたよって暮らしをたててきた。話者の平川一男自宅の土地所有は二畝である。一反の十分の一が一畝で三十歩（約一アール・百平方メートル・約三十・二五坪）としてみると、二畝は約六十・五〇坪ほどなので家を一軒建てるぐらいしかなく、耕地とはいえないほどである。

耕地を一反もつていれば多い方で、普通の家は五畝ぐらいだと聞いた。集落の中には一反ないし、二反の土地所有者もいるとはいいが、漁民の土地所有は少なく、自家消費用の野菜づくり程度にとどまっている。

また、水田を所有している漁家はほとんどなく、話者の家では水田を所有していない。

大分県臼杵市大字大浜(津留)の農業生産暦(新暦) 平川 一男氏聞書
(明治41年12月15日生)

種 類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
大 麦													大麦をさきに刈る
小 麦						---							梅雨前に刈る
サツマイモ										-----			麦を刈ったあとに植える
サトイモ											-----		
小 豆													
大 根													漬物用 他の野菜
ソ ラ マ メ													イモのあいだに植える

(昭和62年 1 月22日調査)

畑地では大麦や小麦が作られてきた。大麦、小麦ともに十一月初旬になると種蒔きをおこない、翌年の五月下旬には刈り取りがおこなわれた。毎年、大麦、小麦ともに梅雨に入る前に収穫するが、大麦を先に刈り取るようにしてきた。したがって、この地では比喩として、二人の姉妹のうち先に妹が嫁に行くと、「小麦が先にうれた」などというそうである。「小麦が先にうれた」というのは、大麦は必ず小麦よりも先に刈り入れてきたという農作業の仕方にかかわったことを意味していたと聞いた。

サツマイモは春の彼岸が過ぎると、イモの苗床にタネイモをふせ、大麦や小麦を刈り取ったあとの畑に植付けた。したがって、三月中旬から作業はおこなわれ、サツマイモ掘りは十月初旬から十一月中旬ぐらいまで作業がつづけられた。

サトイモは六月初旬になると、サツマイモと同じように、麦を刈り取った畑に植えた。サトイモ掘りはサツマイモ掘りよりも少々おそくなっておこなわれるのが普通。

小豆は五月初旬になると蒔き、八月下旬になると取り入れる。

大根は自家消費のための漬物用として栽培した。八月初旬になると種蒔きをおこない、暮れの十二月下旬頃に収穫した。

ソラマメは五月初旬頃に栽培をはじめ、サツマイモやサトイモを植えるあいだにあたるような場所を選んで植えるようにしていた程度である。

その他、ネギ類をはじめ、自家消費用の野菜は、量は少ないながらも、なんでもつくってきた。

(五) イソツキ（漁法）と漁具

調査地の大浜では、磯漁民が船上から海中、海底を見定めて魚貝藻（魚介）類の捕採をおこなう漁法を「イソツキ」と呼んでいることは上述したとおりである。

イソツキによりアワビ採取をおこなうには「アワビオコシ」とよばれる漁具を用いる。アワビオコシは先端の鉄製部分の長さが約三十センチほどで、メダケの棹（竿）の先端にさしこんである。カギの部分は約二センチほどで、曲げた部分を平たく加工してある。（写真参照）

アワビオコシには、同型のものだがカギの部分がやや小さく作られているものもあり、アワビの生息場所（状況）により、使いわけるので数種類（数本）を準備して出漁する。

サザエは「カナツキ」（後述）を使って、はさんであげたり、クルマスキイの網で掬い取ったりした。クルマスキイとは、クルマエビが砂地の中にいるので、クルマエビを掬うタモ網のことである。この地ではタモをタブとい

ったり、網のことを「スイデ」とか「スウテ」、「シイデ」などとも呼んでいる。

ナマコも同じように「スイデ」（シイデ）を用いて掬い取った。（写真参照）

イソザカナは「カナツキ」を用いて突く。大浜で使用してきたカナツキは先端が四本に分かれている形態のものが一般的である。横に四本が並んでいるのではなく、三角形の角の部分に三本と真中に一本が加えられたカナツキである。

小さなカナツキは鉄製の先端部分の長さが二十センチほどで、大きさは各種あり、棹（竿）の部分はいずれもメダケの先にすげられている。

これらの漁具はいずれも臼杵の新町にあつた鍛冶屋に注文して製作してもらったり、臼杵の町中にある道具屋で購入したりした。

また、イソツキをおこなう際、船上から海中、海底を覗くためや、捕採対象物を見定めるために用いるガラスのメガネは「イソカガミ」とか「カガミ」と呼ばれてきた。

イソカガミ使用以前のイソツキの方法については聞くことができなかった。

(六) 漁船・その他の聞取り

「イソツキ」に使用する小型の木造漁船はテンマとよばれ、長さが三尋半から四尋、肩幅が内側で四尺ほどの船であった。大浜にあった「カイデ」という名前の船大工に注文して製作してもらった。イソツキをおこなう際には、この漁船に一人または二人が乗って出漁する。イソツキは漁船のトモの左か右（後方のトリカジ側・オモカジ側）のどちらかの場所でカイを使っておこなう。

ヘイジ一本釣は機械船が使用されるようになってからの漁業で、それ以前はおこなわれていなかった。

ヘイジ一本釣は一本の縦縄に三本ほど枝を出し、大きな釣鉤を付け、下部にオモリを一つ付ける。餌にはアジ・サバの他、イカを用いる。漁船は三・五トンから四トンの大きさで、十時間ほどかけて土佐沖へ出漁することがあった。

タイの延縄はえなわは、十月から翌年の三月頃にかけておこなわれた。タイのハチ（ユリバチ）は三十パチほど持つていく。潮によって、朝出漁し、ひとばん海中において、翌朝帰ってくる。

船玉様は男女一対の人形・銭・五穀などを祠る。四つ足の動物は食べない。蛇をきらい、長虫という。ウメボシの種を海に流してはいけない。刃物（キレモノ）を海にすてない。これは井戸の中も同じこと。流れ仏は必ずあげてやらなければならない。拾えば大漁になるといわれるが、そのままだと不漁になるといわれた。坊さんを船に乗せると縁起がいいといわれた。

(七) まとめ

筆者がはじめて臼杵市の調査地におもむいたのは昭和五十二年（一九七七）八月一日であった。この時は臼杵市漁業協同組合の海部支所^{あまべ}において、当時、組合事務を担当しておられた稲垣美代子氏から組合所蔵の資料（文書）を拝見させていただき、庵寺の墓碑に案内していただくにとどまった。

次に資料調査をおこなったのは昭和六十二年（一九八七）一月二十二日で、この時も稲垣氏に数々のご教示をたまわった。この間、十年が経過しており、臼杵市の駅前には立派なホテルも建設されていた。

本調査の内容は、このように二度にわたる調査結果をまとめあげたものであるが、特に大分県臼杵市大字大浜二一五に在住の平川一男氏（明治四十一年十二月十五日生）からの聞き取りによるものである。話者は「イソツキ」を専門におこなってきた漁業者であり、資料として撮影させていただいたイソツキの漁具はすべて平川一男氏が使用・所有していたものである。

現在、市販されている地図に「津留」という小字はみられないが、国土地理院発行の地図の中には表示されている。（地図参照）

稲垣美代子氏によると、大浜と津留の距離は一キロとははなれていないのに言葉にちがいがあり、「あなた」のことを大浜では「あんた」というが、津留では「がら」とか「がいらー」といったり、津留では男の子を「ぼー」、女の子を「びー」と呼ぶなど方言やなまりも異なると聞いた。

津留（臼杵市大字大浜）へ出漁して定住した広島県の能地の家船の人々が網漁（テグリ網等）にあわせて、瀬戸内海の家船の人々が伝統的にこなうことのなかった「視突き漁」（大浜ではイソツキという）を組み合わせて魚貝藻（魚介）類の捕採をおこなってきたのは、内海とはちがった捕採対象物が新しく住んだ臼杵湾の海にはあったため、新しい漁法を組み合わせるの漁業生産をこの地に来てからおこなうようになった結果とみてよい。^{注6)}

また、本調査地においては、昭和の初期以降、漁船が大型化・動力化することにあわせて漁獲対象物が増加し、新しい漁場の開拓がなされたことなども、漁業生産の拡大と漁村の発展とのかかわりをみていくうえで見のがせない。また、同じ大分県内でも臼杵市と隣りあわせの津久見市の保戸島とを比較してみると、「見突き漁」を臼杵市の大浜（津留）では「イソツキ」と呼称するのに対して、保戸島では「イサリ」と呼称するなど、近くでも異なる点が目される。（地図参照）

未筆ながら話者の方々はもとより、漁業協同組合をはじめ、お世話になった平川一由氏（大浜二七一）に謝意を表するしだいである。

参考文献及び引用文献

羽原又吉『漂海民』岩波新書（五〇四・東京）一九六三年

拙著『海女』（ものと人間の文化史）法政大学出版局 一九九三年

拙著『日本蟹人^{あま}伝統の研究』法政大学出版局 一九九〇年

秋本吉郎校注『豊後国風土記』日本古典文学体系⁽²⁾所収〔風土記〕 岩波書店 一九五八年

注

(1) 羽原又吉『漂海民』岩波新書(五〇四・東京) 一三八頁 一九六三年

(2) 拙著『海女』(ものと人間の文化史) 法政大学出版局 一四二頁 一九九三年

(3) 注⁽¹⁾に同じ 一三八頁

(4) 拙著『日本蟹人^{あま}伝統の研究』法政大学出版局 一二四頁～一二五頁 一九九〇年

(5) 秋本吉郎校注『豊後国風土記』日本古典文学体系⁽²⁾所収〔風土記〕 岩波書店 三六六頁 一九五八年

(6) 注⁽²⁾に同じ 一四三頁



臼杵市大字大浜の先祖墓



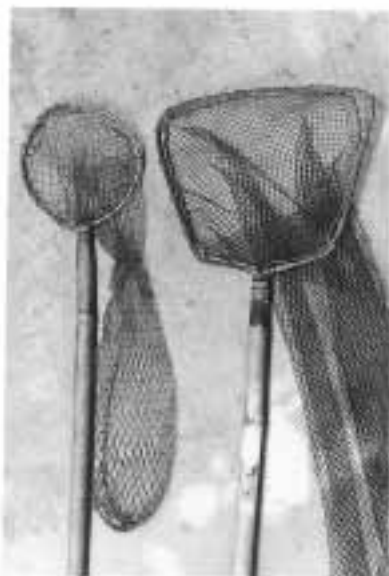
「津留邑大先祖之」と
みえる（嘉永四年建立）



大浜の庵寺（あんでら）
墓地に「先祖墓」がある
（左も同じ）



イソツキに使用する漁具



ナマコ等を掬うスイデ (シイデ)



左の三本はカナツキ

右の二本はアワビオコシ



組合所蔵文書



津留の集落を望む
(前方は大浜)



大分県津久見市保戸島
国土地理院発行 1 : 25,000



組合所蔵文書